

高齢者の快適で安全な生活支援のための色彩の役割について

研究代表者 高知女子大学 川口 順子

私たちは、多くの色彩に囲まれて生活しています。信号の色によって社会秩序を保ったり、目立つ色によって危険を感じたり、野菜や果物の色を見て新鮮であるか熟しているかを判断するなど、色彩は生活の中に大きな役割を果たしています。しかしこの色彩を判別する機能は年を重ねるにつれて変化します。本研究では、高齢者の色彩弁別能力を60歳以上の女性85名を調査対象として検討しました。

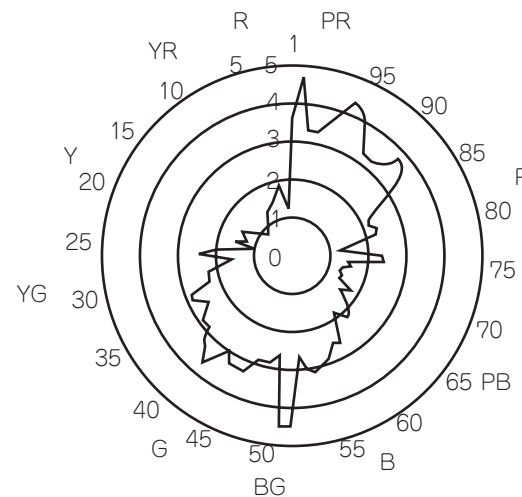
加齢が進行するにつれてすべての色相で色彩弁別能力は低下しますが、とくに赤紫および青緑領域で低く、黄、黄赤、および青紫領域では比較的高い結果を得ました。

また、80歳を超えると急激に色彩弁別能力が低下すること、白内障を発症した者とそうでない者に有意な差があることを明らかにしました。

これらのことから、高齢者に対する生活環境作りには、年齢に応じた色彩弁別能力を正確に知り、社会基盤を整備していく必要があると考えられます。



高齢者が識別しにくい色を正確に把握し、生活環境作りをする必要がある



100 hue testによる100色相別偏差点は赤紫と青緑領域が高く識別しにくい色相である